



**Data**

監督：ハ・ジョンウ  
 原作：余華 (ユイ・ホア) 「血を売る男」 (河出書房新社)  
 脚本：キム・ジュホ / ハ・ジョンウ  
 出演：ハ・ジョンウ / ハ・ジウオン / チョ・ジヌン / ユン・ウネ / ナム・ダルム / チュ・ジン / モ / ミン・ムジェ

## 👁️👁️ みどころ

ノーベル賞作家、莫言と並ぶ、中国文壇を代表する作家、余華の代表作は『活きる』だが、近時の問題作『血を売る男』も大ヒット！前者は張芸謀（チャン・イーモウ）監督が映画化して中国映画の代表作となったが、後者は韓国で映画化！その理由は？そして、本作の設定は？

原作の骨格はそのままで、『いつか家族に』という邦題は私にはイマイチ迫力不足の感がある。また、血液鑑定を巡る実の父親は誰かと言う争いも、韓国テイストなのかどこかユーモラス。“生みの親”と“育ての母”の確執をテーマにした『光をくれた人』や『八日目の蟬』のようなシリアスさに欠ける面も・・・。

クライマックスでは“我が子”の手術代のために血を売り続ける奮闘ぶりが描かれるが、それも国民皆保険制度が完備した日本では考えられないこと。そのため、イマイチ現実感なし。もっとも、喜多嶋舞と大沢樹生のDNA騒動が起きている今の日本に比べると、本作にみる父子関係の姿には、それなりに涙、涙・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■中国の作家・余華の原作が、なぜ韓国で映画に？■□■

中国の張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『紅いコーリャン』（87年）（『シネマ5』72頁）が中国のノーベル賞作家莫言（モー・イエン）の原作『紅いコーリャン』の映画化なら、同じ張芸謀監督の『活きる』（94年）（『シネマ5』111頁）は、莫言らと共に中国文壇を代表する作家、余華（ユイ・ホア）の原作を映画化したもの。したがって、その余華の

近時のベストセラー小説『血を売る男』を映画化するのなら、当然、“中国第五世代”を代表する張芸謀監督が最適。私はそう思うのだが、なぜかその原作が、なぜか中国ではなく韓国で映画に！

本作は主人公もストーリーも原作通りに設定しているが、何せ中国の現代史と韓国の現代史は全然違う。つまり、中国では『活きる』で見事に描かれていたような、①毛沢東が1958年から行った“大躍進政策”の失敗による大飢饉（1959～61年）や、②1966～76年まで約10年間も続いた“文化大革命”の大混乱があったから、その時代を生きていた庶民は大変だった。余華はそんな中国の社会問題を生々しく描く中で、「骨血之親」と呼ばれる中国の親子の血の関係をテーマにした問題提起作を発表したわけだ。中国では古代より「血液に生命の魂が宿る」と信じられ、血は一種のタブーになっていたらしい。したがって、1949年の中華人民共和国建国後も、血に対する信仰は献血制度普及の足枷となり、今もお売血制度が残されているわけだ。そんな中国特有の“父子の血の物語”を韓国で映画化するについて、本作は時代と舞台を1953年の朝鮮戦争終戦直後に設定しているが、その是非は・・・？

## ■□■導入部の展開は？血を売ることの“重み”は？■□■

本作冒頭、建築現場で働いている男サムグァン（ハ・ジョンウ）がポップコーン売りの美しい娘オンナン（ハ・ジウォン）に一目惚れするシーンが登場する。ところが、彼女には大金持ちの恋人ハ・ソヨン（ミン・ムジェ）がいたため、続いて、サムグァンは強引に親を説得することによって、その難関を突破しオンナンとの結婚に至るストーリーが描かれる。これを観ていると、その展開はとにかく韓国的だから、これが中国の作家・余華の原作とは到底思えない。『活きる』で観た中国では、決してこんな風景はあり得ないだろう。コミカルな面を含めて、なるほどこれが主演のハ・ジョンウが監督も兼ねている韓国風テイストの映画だと感じながら観ていると、たちまち時代はその11年後に。すると、そこではあの美しかったオンナンも3人の男の子の母親に・・・。

他方、余華の小説のタイトルは『血を売る男』とどこか深刻そうだが、それを映画化した本作のタイトル『いつか家族に』はどこかふわっとした暖かいイメージ。しかも、本作の導入部にサムグァンが血を売るシークエンスが登場するが、それは若く健康なサムグァンが友人たちと一緒に面白半分、ある医院を訪れるもの。しかも、そのシークエンスは血の鉄分を増やすためには水をたっぷり飲んだ方がいいという、ホントかウソかわからない迷信に従ってユーモラスな展開になるから、血を売るという悲愴感は全く感じられない。さらに、血を売ることの対価はかなり高そうだから、若くて健康的なサムグァンやその友人たちなら、時々血を売れば美味しいものを食べ放題！

そんな本作導入部では、サムグァンの“嫁取り”もサムグァンの“売血”も楽しい“青春の一コマ”のようだったが・・・。

## ■□■父親は誰？血液型は？それを公開で調べるの？■□■

日本では近時、喜多嶋舞と大沢樹生との間で子供の父親は誰か？という問題を巡って行われたDNA鑑定が大きな話題になったが、これは、芸能人なればこそマスコミが追っかけたスキャンダル。したがって、3人の男の子に恵まれ、家族5人で仲良く暮らしているサムグエンとオンナンにとって、長男のイルラク（ナム・ダルム）が父親のサムグエンにまったく似ておらず、オンナンの昔の恋人ソヨンに似ているとしても、それは気にしなければいいことだ。

ところが、万事おせっかい好きな（？）韓国人のコミュニティの中で、年がら年中そのことを言われ続けていると、さすがのサムグエンもそれが気になったようで、イルラクの血液型を調査してもらおうと公衆の前で約束したから、さあ大変。ソヨンの血液型はB型、オンナンはA型、そしてサムグエンはO型だが、さてイルラクの血液型は？O型ならもちろん問題なしだが、もしAB型だったりしたら・・・？その“結果発表”の日には、友人たちが多数集まったが、何とそこでは最悪の結果が！つまり、サムグエンはイルラクの父親でないことが明白になっただけでなく、血液型からすれば、噂通りその父親はソヨンである可能性が・・・。

サムグエンがそれをオンナンに問い正すと、オンナンは最初“否認”していたものの、とうとう“1度だけソヨンと・・・。無理やりソヨンが・・・いやいやだったけど気持ちがあふあつとなりソヨンと・・・”と少しずつ“告白”したから、やっぱり・・・。俺は11年間違う男のタネの息子を、俺とオンナンの間の息子だと信じ込んで育ててきたのか！そう思うと、サムグエンのやりきれなさは何ぼばかり・・・。

## ■□■どちらの“父親”が育てるの？子供の視点は？（1）■□■

『光をくれた人』（16年）は“生みの母親”VS“育ての母親”の親権の争いや女同士の確執を描いた名作だった（『シネマ40』239頁）。また、ストーリーはまったく違うものの、全く同じ論点をテーマにした邦画の名作が、永作博美と井上真央が共演した『八日目の蟬』（11年）だった（『シネマ26』195頁）。このように、親権を巡って女の争いが物語のテーマになることは多いが、本作では血液鑑定の結果、イルラクの父親がサムグエンではないこととソヨンの可能性が高いことが明らかになると、サムグエンとソヨンのどちらがイルラクを引き取り育てるべきかという現実的な論点が生まれてきたのは当然。また、その中でイルラクの意思が無視されたまま、イルラクが振り回されていくストーリーが描かれるので、それに注目！

その第1は、サムグエンが今まで育てていたイルラクを連れてソヨンの家に行き、「お前の子供だからお前が育てろ」と言いながらイルラクを引き渡そうとする行為。これはいかにも韓国的だが、その是非は・・・？それに対して、こちらにも既に美しい（？）妻と結婚

し、今は2人のかわいい女の子の父親になっているソヨンは、断固拒否。その理由の1つは「俺の子供だという確証はない」ということで、それは確かにごもっとも。しかし、それ以上の実質的な理由は、安定している我が家に、今更俺の子供としてイルラクを引き入れることなどできっこないということだ。こうやって父親(?) 同士は勝手にケンカしていればいいのだが、一番可哀想なのは自分の居場所がどちらにもなくなってしまったイルラクだ。

## ■□■どちらの“父親”が育てるの?子供の視点は?(2) ■□■

第2は、ある日父親を巡ってガキ大将にからかわれたイルラクが、ガキ大将を殴って大ケガをさせたため、その両親から多額の損害賠償の請求がなされること。それを支払うべき監督権者(父親)は、サムグァン?それともソヨン?日産のカルロス・ゴーン元会長の私的な投資で生じた約18億5千万円の評価損について、これを日産につけ替えたというのが彼が再逮捕された特別背任容疑だが、イルラクの父親たるサムグァンが負担すべき不法行為による損害賠償金をサムグァンからソヨンにつけ替えることは認められるの?

第3は、本作には、ある日交通事故に遭遇したソヨンが瀕死の重傷を負ったため、あの世に向かおうとするソヨンを“祈祷”によって現世に引き戻そうとする風景が描かれるが、その儀式のためには後通りの男の子たるイルラクの参加と協力が不可欠。そのため、それまでは自分の子供ではないとしてイルラクを毛嫌いしていたソヨンの妻は、態度を180度転換させてイルラクに対してハ家の長男として祈祷に協力することを要請したが、さてイルラクは・・・?

生みの母親であるオンナンはそんなイルラクの立場と気持ちを理解し、何かと支えになっていたが、スクリーン上にみる2人の“父親”の争いをみていると、男のバカさ加減がクッキリ見えてくるから面白い。そんな中でもグレルこともなく懸命に父親サムグァンと共に生きていこうとしていたイルラクだったが、ある日バツタリ倒れてしまったからアレ。サムグァンが急いでイルラクを病院に運び込んでみると、その病名は何と脳炎!すぐに手術しなければならないが、そのためには5万ウォンという大金が必要。さらに、手術しても一命をとりとめるかどうかわからないという難病だ。そんな事態に直面して、さあ2人の父親(?)はどう動くの?そして、母親オンナンは?

## ■□■何のために血を売るの?国民皆保険制度さえあれば■□■

イルラクが脳炎で倒れて以降、本作はサムグァンが血を売り続けるクライマックスのシークエンスになるが、それは一体なぜ?それは血縁関係がないため実の父子でないものの、11年間も息子として育ててきたイルラクをサムグァンがやはり“俺の息子”と認めたためだ。もっとも、イルラクの手術のためには5万ウォンもの大金が必要だが、そのためにサムグァンは一体どれだけの血を売らなければならないの・・・?

今は忘れ去られてしまった感があるが、アメリカで民主党のヒラリー・クリントン大統領候補が掲げた目玉政策の1つが国民皆保険だった。つまり、マイケル・ムーア監督の『シッコ』(07年)、『シネマ15』269頁)では、貧しい社会主義国のキューバですら国民皆保険が充実している姿(?)が描かれていたが、自由の国アメリカは日本のような国民皆保険の制度が存在しないわけだ。そのため、『ジョンQ—最後の決断—』(02年)で見たように、息子の手術をしてもらうために父親が“病院ジャック”をしてドクターに手術を迫るといふとんでもないストーリーの映画まで登場していた(『シネマ2』137頁)が、そんな姿は日本では考えられないものだ。今や世界一の理想的な共産主義国になったと考えられるニッポン国では、国民皆保険があるから、どんな病気になってもわずかな費用負担で手術してもらえるのはもちろん、救急車なんていくらでもタダで使えるのが当たり前。そんな天国のような状態になっている現在の日本に比べると当時の韓国では、金を払わなければ手術をしてくれないのはもちろん、入院さえさせてくれず、父親は我が子の手術代を稼ぐため何度も何度も血を売らなければならなかったわけだ。しかし、いくら健康なサムグァンでも、そんなに血を売って大丈夫・・・？

本作はクライマックスシーンが続く中で、そんな涙、涙のシーンが連続するので、それに注目！さらに、そんな命懸けの金策にもかかわらず、サムグァンの努力は無駄になってしまったと思ったが、何とかイルラクは無事手術を終えていたから、やれやれ。しかし、その手術代は一体誰がどうやって工面したの？そう思っていると、血を売るだけが能ではなく、腎臓を売れば更に大きな金になるそう。本作のそんな現実を見ていると、つくづく国民皆保険さえあれば・・・。そう思ってしまったが・・・。

2019(平成31)年1月11日記